

資料

帝国カンマー裁判所法（二五五五年）(5)

文字 浩

二 〔承前〕

LXXXVI. ユダヤ人の宣誓の秩序と形式

§.3. ついで、ユダヤ人は、この宣誓に対し、この書が、その者から宣誓を要求するキリスト教徒、あるいは、キリスト教徒に代わって宣誓を命じる者が、その者の前に置いて、このようなつぎの問いと戒めを読み聞かせることができる書であると認めるとの陳述をする。すなわち、ユダヤ人よ、私は、汝に誠実に述べる。我々キリスト教徒は、天地、万物を創造した唯一の全能の神を崇拝し、その神の外には神を持たず、敬わず、崇拝しないと。私が、このことを汝に語るのは、汝が、我々キリスト教徒の信仰が間違っており、他の神を崇拝していると思いうることにより、神の前にて、誤った宣誓を容赦されるかも知れぬと考えるためである。だが、これは、イスラエルの民のネジ―あるいはハウプトロイテが、他の神に仕えるギファンの人々に宣誓したことを守る責任があつたが故ではなく、むしろ、汝は、全能の神を崇拝する者たる我々キリス

ト教徒に宣誓し誠実で偽りなく宣誓する責任がある。

§.4. ユダヤ人よ、私は汝にそれにつき問う。汝は、ある者が間違つた偽りの宣誓をすることにより、全能の神を侮辱し冒瀆したと信じるかと。ユダヤ人は答える。はい、と。

§.5. キリスト教徒は言う。ユダヤ人よ、私は汝にさらに問う。汝は、熟慮し、あらゆる悪意と欺きなしに、汝が宣誓を命じられたこの事件において、いささかの方法にても、虚偽、間違い、偽りを陳述したり、用いたりしないことの真の証人に、唯一の全能の神を立てるかどうか、を。

§.6. これらすべてが行われたとき、ユダヤ人は、その者の右手を関節まで上述の書に置き、ヘブライ語で、*Lo tissa et schem Adonay elohecha laschaff kij lo jentak Adonay et ascher jissa et schemo laschaff* ドイツ語で、汝の神の主の名をむやみと悪用しない。主は、その名をむやみと悪用した者を、罪なく罰せられぬままに捨て置かないであろうとの神の律法の言葉を陳述すべきである。

§.7. ついで、ユダヤ人は、それに基づき、宣誓を行う前に、その者が宣誓をなすべきキリスト教徒、あるいは、キリスト教徒に代わり、その者に宣誓を命じる者に、この〔つぎの〕言葉を繰り返すべきである。

§.8. 汝、我々に神聖な律法を与えた永遠の全能の神、すべてのメラヒムの主、父祖の唯一の神たるアドナイよ、私は、汝と汝の神聖な名前アドナイと汝の全能にかけて、汝が私を救けて私が今から行う宣誓の真なることを確認するよう汝に求める。そして、私が誤り偽って宣誓するときは、永遠の神のすべての恩寵を奪われ、神がいまわしいユダヤ人に科したすべて

の神罰が私に科せられる。そしてまた、私の霊肉は、もはや、神が我々になした約束に与ることなく、また、私は、メシアにも約束された聖なる天国の地にも与らない。

§. 9. また、私は、永遠の神アドナイに約束する。私は、今から行う宣誓にてある者を欺くであろうとき、ユダヤ人、その他の者につき、贖罪や赦免を求めようとしない、と。⁽¹⁾

(1) ルドルフ版では、この条文は第八条の一部とされており、この節の条文数は九条しかないことになっている (G. M. Ludolf, aaO., S. 151)。

§. 10. ついで、ユダヤ人は、この宣誓の後、キリスト教徒に〔以下のごとく〕宣誓を行う。天地と万物、またここにある私と人間の創造者たるアドナイよ、私は、この時に、汝の聖なる名前を通して真実につき汝に求める。N が私にあれこれの行為を主張したとき、私は、その者に、それにつき何ら責任ないし義務はなく、そしてまた、この行為においていかなる誤りも不真実も用いず、知れ渡っているように、本案、債務、その他の事件に関することは、あらゆる悪意、悪だくみ、隠し立てなく真実である。従って、私は、神アドナイに私を救けてこの真実を確認するように求める。しかし、私がこの訴訟において、正しさと真実を持たず、そこにおいて、真実でないこと、誤り、欺きを用いたときは、私は、ヘラムであり、永遠に神罰を下され、また私がこの事件において真実と正しさを持たないときは、炎が私をつつみ焼き尽くし、ソドムとゴモラに堕ち、律法に書かれたすべての災いを被り、また、葉草と万物を創造した真の神は、私の事件と必要において、もはや断じて私を救けることに役立たない。しかし、私がこの訴訟において真実と正しさを有するときは、真の神アドナイは私を救ける。

皇帝のカンマー裁判所法 第二部：

第一審における皇帝のカンマー裁判所の権能と裁判所強制

第一部の場合と同様、条文の試訳に先立ちラウフスの叙述に依拠して第二部の概要を示しておくことにした（A. Laufs, aaO, S. 39-45）。

第二部は、「裁判権について」というそのタイトル以上のものを含んでいる。帝国直属者の仲裁裁判権、第一審のカンマー裁判所の裁判管轄権——とりわけ、ラント平和の保護のための司法拒絶の場合のそれ——、皇帝のカンマー裁判所へのアペラチオン。我々から見ると、第二部の条文の編纂も嚴格に体系化されておらず、裁判所組織規定と訴訟手続的規定とが混在している。また、第二部の最後の節（RKGO 155, II, XXXVI）には、帝国議会により決定されたカメラル法を真正に解釈するだけでなく、査察と査察の間の時期につき、規定を拘束的に補充し改正する権限を裁判所に認めるとのこのカンマー裁判所法全体にとり有益な規定が置かれている。

ベルトルド・フォン・ヘンネベルクを中心とする等族的な改革派は、新たに創設されるべきカンマー裁判所を帝国諸侯のための唯一の第一審とすることに成功せず、一四九五年法は、伝統的な仲裁裁判所（*Arbitrage*）に第一審的な特別裁判所たる地位を承認した（RKGO 1495, § 28）。選帝侯、諸侯、諸侯同格者間に存在する任意の仲裁は存続された。このような仲裁がない場合には、原告の要求に基づき、被告たる諸侯が、聖俗二名ずつ四名の一つの家門出身でない選帝侯、諸侯、諸侯同格者を指名し、その中から、原告が、一名の者を仲裁裁判官に選ぶことになっていた。この仲裁裁判官は、顧問とともに皇帝のコミサルとして機能した。当事者は、その仲裁裁判官に対して、カンマー裁判所にアペリーレンすることができた。仲裁制度の魅力は、強制的でない手続のあり方に基づいていた。このカノン法を持つ和解的傾向に由来する仲裁手続は、本質的に緩められた形式的厳格性と非常な迅速性、さらにより少ない煩雑性という長所を有していた。これに対して、この制度の明らかな弱点は、仲裁裁判官が中立的でないことの恐れにあった。このことは、しばしば管轄裁判所をめぐる争いを——とりわけ、政治的利益が絡んだ事件の場合に——付け加えることになった。モストによれば、帝国の裁判所組織における仲裁裁判権の採用は、長い発展の結果であった。旧い帝国宮廷裁判所が顧みられなかったことは、仲裁制度を豊に花開かせることになり、そして、最後には、最上級帝国裁判所は任意の裁判権により圧迫されることになった。また、ロットヴァイルの皇帝の宮廷裁判所も裁判権に争いのある領域では麻痺状態に陥った。皇帝をしばしば仲裁裁判官に任命するという慣行は、他面では、カンマー裁判所を帝国宮廷裁判所を補充す

る最上級裁判所とすることに寄与したのである (I. Most, Schiedsgerichte, Rechtlicheres Rechtgebot, Ordentliches Gericht, Kammergericht. Zur Technik fürstlicher Politik im 15. Jahrhundert, in: Aus Reichstagen des 15. und 16. Jahrhunderts, 1958, S. 117 f.)。

拡大され個別化された一五四八／五五年のカンマー裁判所法の仲裁裁判所システムは、このような背景の下に観察されるべきである。それは、中世後期のアイヌング制度の慣行を、その身分的留保と人的関連性とともに継続し、また、それとともに、「等族的自由」に基づく継受の時代に、——とりわけ、強大な世俗的帝国直属者の——領邦政策的野心に役立つために——とりわけ、強大な世俗的帝国直属者の——法発見の合理性に限界を引き、これにより、裁判所の裁判権が制限されることを維持した。第一審としてのカンマー裁判所に訴えられるのは、原則的に帝国直属者のみであり、ただ、正規の下級裁判所において、一カ月以内に審尋がなされない場合には、帝国非直属者も訴えられた。ついで、「帝国の直属する者および物について」詳細な規定が設けられた。だが、第一審は、カンマー裁判所ではなく、広く仲裁裁判所にて。まず第一に、選帝侯、諸侯、諸侯同格者の相互の紛争の場合の手續が現れ、ついで、それに基づき、諸侯の聖職者、グラーフ、フライヘルに対する手續が現れる。原告たる聖職者、グラーフ、ヘル、都市の被告たる諸侯に対する仲裁手續において、原告に不利な諸侯の顧問裁判所、一四九五年法の悪評のももらい裁判所 (Suppensegerichte) が考え出された。

最後にまた、帝国直属の聖職者、グラーフ、フライヘルもそれらの者の間で行われる訴訟につき、それらの者の仲裁裁判権を保持していた。ここでも、その他の場合と同様に、カンマー裁判所へのアペラチオンは許されたままであった。その場合、当事者には、仲裁司法 (裁判) を効果的にするため、原則として新たな事実の陳述は拒否された。カンマー裁判所法は、占奪訴訟において、権利保護手續に広範な余地を与えていた。「普通單純占奪」 (Gemeine schlechte spolie) あるいは「占奪」 (Entsetzung) は、奪い去って占有しようとすることを意味する。これは、——「武器を持つ手と暴力的な行為」にて遂行されないの——ラント平和を破ることにならない。ここでも、仲裁手續が、形を変えて拡大することになった。仲裁裁判官は、略式に (普通) 法により (nach Ordnung der Rechte) 手續を進め、事件を一年以内に終局判決まで進めなければならなかった。また、市民と農民も原告として登場することができた。カンマー裁判所は、補助的に執行の目的にも携わり、その外、アペラチオン審としても訴えられた。

ラント平和侵犯の場合、カンマー裁判所に第一審管轄権があった。ラント平和侵犯者は、神聖 (ローマ) 帝国の追放刑に処せられ、付加的に威嚇的処罰を受けた。皇帝、あるいは、カンマー裁判所は、被害者、フィスカルの申立により、あるいは、職権により侵犯者を訴求した。カンマー裁判所は、威嚇的なラント平和侵犯を追放刑の威嚇の下に、命令 (Mandate) によって阻

む権限を保持した。特別な手続が行われたのは、ラント平和侵犯の嫌疑者に対する「充分な理由」のある場合であった。その者は、正規の裁判官、皇帝、カンマー裁判所のいずれかの面前にて、宣誓により嫌疑を晴らし、無実を証明しなければならなかった。個々のに確定された裁判上の手続によりラント平和侵犯の嫌疑を晴らす訴訟 (Purgationsprozess) を拒んだ者は追放刑に処せられた。職権により、あるいは、被害者、皇帝のフィスカルのいずれかの者の申立に基づくこの訴訟の手続は、特に、その者の財産を危険な方法で譲渡し、あるいは、財産を他の者からラント平和侵犯を助成する形で受け取り、そのために嫌疑を受けている者に対して行われるべきであった。また、カンマー裁判所は、「逃亡した」、すなわち、そのヘルシャフトを去った臣民に対する争い、あるいは、流浪し主君のいない傭兵による困難に対する争いにおいても、ラント平和保護の審級となった。軍事的な強制措置の準備の場合と同様、——その限りで改正された——カンマー裁判所法はアウグスブルクのクライス執行法をしん酌していた。

ラント平和に関する監視は、——暗示されたように——また、フィスカルの責任でもあった。フィスカルは、その者に付けられた二名の陪席判決人と協力して、金印勅書 ラント平和法、皇帝あるいはカンマー裁判所の命令に違反する場合、帝国税を懈怠する場合、一五四八年の帝国ポリツアイ法に対して違反する場合、全キリスト教徒の敵対者たるトルコとの協力の場合、再洗礼派と主君のいない傭兵に対する争いにおけるオーブリツヒカイトの懈怠の場合、最後に、ウェストフアリアのフェーメ裁判所に関する帝国基本法を無視した場合に干渉し、カンマー裁判所で訴訟を遂行すべきとされた。

占有訴訟と命令訴訟について規定した後、一五四八/五五年法は、最後に、カンマー裁判所の第二審の管轄権、アペラチオン訴訟を取り扱う。まず、カノン訴訟と世俗的イタリア訴訟の構成要素たるアペラチオンが、中世盛期以来、停止効と移審効を伴う正規の上訴方法として、中世盛期以降、漸次ドイツ地方に到達し、一五世紀の後半になってはじめて伝統的な判決非難を押しやった。この新たな上訴方法は、領邦の上級審と学識裁判官の形成を促進した。ランデスヘルは、独自の司法高権の利益において、臣民が帝国の最上級裁判所にアペリレンすることを阻止しようとした。カンマー裁判所法は、このことを証明している。それによれば、仲裁裁判所 (Austraegalreimen) と正規の下級裁判所からのアペラチオンは、段階的に審級を飛ばさないうで、カンマー裁判所に達する。刑事事件におけるアペラチオンは、神聖(ローマ)帝国の古い慣行により排除されたままであった。カメラル法は、中間判決に対するアペラチオンを制限し、不服の最低額、すなわち、上訴制限額を一般的に五〇グULDENに確定することにより、アペラチオンの増加を予防しようとした。アペラチオン期間は一〇日であった。不服者は、下級裁判官ならびに認可された公証人の面前にて判決の取り消しを求め、さらに、六カ月の内にアペラチオンをカンマー裁判所に継続させなければならなかった。カンマー裁判所法は、「下級審の裁判官は訴訟記録をいかにしてどのように取りまとめるべ

きか」につき詳細に規定している。ここには、ただ、下級裁判官に対し、「書面にて行うこと」、口頭による陳述をその都度調査にとらせる規定が見られる。アペラチオン手続は、訴訟の書面性を前提とする。そして、下級裁判所に対し、シュバイヤーにとつて必要な資料を熱心かつ入念に作成することが求められている。フランス語の訴訟記録を下級裁判所はラテン語に翻訳して当事者に知らせるべきとする条文（第三一節第七条）が、アペラチオン審たるカンマー裁判所の管轄区域につき示す暗示は興味深い。最後に、カンマー裁判所の強制状は、懈怠している下級裁判官に対し急いで訴訟記録を取りまとめることを命じる。これは、アペラント自らが訴訟記録の写しを申し立て、その者に付与された文書を仲介して上級裁判官に提出するという普通法上のやり方を強調していた。

Ⅰ. まず最初に、帝国に直属せず他の裁判所の下に服し、第一審につき

カンマー裁判所に属しない者および事件について。

§. 1. 朕は、まず最初に（以下のごとく）定める。すべての神聖（ローマ）帝国の所属者および臣民は、（本法によりカンマー裁判所に直属する事件以外は）、それらの者の通常のラント内の裁判所に委ねられ、各人は、その者が直接にゲゼツセンし所属している裁判所において審理される。当事者の申立により、一カ月以内に裁判は開始され、その下級裁判所の成文法および慣習法等による訴訟は、各諸侯領、グラーフシャフト、ヘルシャフト、オーブリッヒカイトの称賛すべき伝統と慣行に従って行われる。だが、それと並んで、聖俗のすべての各オーブリッヒカイトは、しかるべき注意を払い、聖俗裁判所の濫用と無秩序を除去し、そこでは、普通法に従って秩序よく形式的に手続がなされ、各人は相手方をその者の訴訟にとどまらせるべきである。あらゆる種類の悪事、嫌悪、また、そこから生じる訴訟の無効をそれによって未然に防ぐために。⁽¹⁾

(1) RKG 1500, XII.; RKG 1521, XXX, vlt §. 19.; RA 1500, X.; RA 1512, §. 58.

§. 2. 従つてまた、第一審たる皇帝の⁽¹⁾カンマー裁判所は、いかなる者の訴えあるいは申立に基づいても、皇帝陛下と帝国に

直屬せず、正規の裁判官を有する者に対して召喚を認めるべきでない。いかなる者がこのような召喚を得たとしても、召喚は、これに続くすべての行為とともに無効である。ただし、ある者が、通常の下級裁判所に訴訟を求めたが、申立の後一カ月が経過しても訴訟を得られなかった場合、訴訟がその者に対し明白に拒絶された場合、あるいは、悪意で「訴訟が」遅延された場合はこの限りでない。いずれの場合にも、従つて訴訟を拒絶あるいは遅延された者は、その下級裁判所の直近のオーバーカイトおよびヘルシャフトに対し、その者が訴訟を得られるように申し立て、その者につきしかるべく訴訟が得られないときは、このことを皇帝のカンマー裁判所に申し立てることができ、その場合には、拒絶された訴訟に関する以下の規定にてそれにつき述べられているごとく、その者に対し訴訟が得られるべきである。⁽²⁾

(1) 原文は、in erster Instanz oder Rechtfertigung である。Rechtfertigung が手続、手続過程を意味するところ、Vgl. B. Dick, aO., S. 130. など。シチルニハルは justifiere 同義である (A. Stolzel, Die Entwicklung der gelehrten Rechtsprechung, Bd. I, 1901, S. 24)。

(2) RKG 1521, XXII.; RKG 1555, II, XXVI.

帝国に直屬し第一審につきカンマー裁判所に属しない者および事件について。

II. 選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、いかにして、いかなる裁判官の面前にて

互いに法的手続を求めるべきか。

§. 1. さらに、それらの者の一人が他の者に対して有する請求をめぐる聖俗選帝侯、諸侯、諸侯同格者の手続は、〔以下のごとく〕行われるべきである。相互に特別な任意の法的仲裁の合意がある者は、仲裁を互いに利用するが、相互に法的仲裁の合意がないときは、原告となる選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、請求の相手方たる聖俗の選帝侯、諸侯、諸侯同格者に対して書面を作成し、その書面にて、請求に関する法的手続の申立とともに請求をその者に示すべきである。⁽²⁾

(1) gewillkürte Austräge $\text{Vgl. G. Fruhau, Die Austrägalgerichtsbarkeit im deutschen Reich und im deutschen Bund, 1976, S. 17 f.}$

(2) RKGÖ 1495, §. 24.

§. 2. 作成された書面にて要求された聖俗の選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、原告に対し、この要求後四週間以内に、聖俗二名ずつ同一の家門出身者でない統治せる四名の選帝侯、諸侯、諸侯同格者を誠実に指名し、原告は、その中から一名の者を裁判官に選ぶとともに上述のごとく指名後四週間以内に、要求された選帝侯、諸侯、諸侯同格者に対し上述のごとく書面にて誠実にこのことを表明し⁽¹⁾宮廷に告知すべきである。そして、両当事者は、その後一四日以内に選ばれた者に対し受諾と期日の指定を求めるべきである。また、その者は、ローマ国王たる朕が、汝等の親愛なる皇帝陛下により朕に与えられし委任代理権により皇帝陛下の代わりに、ここにて各人に行おうとしたコミサリウスにより皇帝のコミサリウスとしてこれを受諾し追行する義務がある。そして、その選ばれた皇帝のコミサリウスは、速かにその者の都市の一つにおいて誠実に〔仲裁〕期日を指定し、その者の中立的な顧問とともに事件を法的にしかるべく審尋し裁判すべきである。だが、いかなる当事者からも、皇帝のカンマー裁判所の前へのアペラチオンは奪われず、アペラチオンが受け入れられるか否かについては、以下に規定されるアペラチオンに関する条文によるべきである。そして、手続の終結前に、選ばれたコミサリウスが辞めるときは、原告は他の三名の提案された選帝侯、諸侯、諸侯同格者の中から、先に条文上示されたごとく皇帝のコミサリウスとしてそれを受諾し追行する義務のある別の一名の者を選ぶべきである。そして、辞めた選帝侯、諸侯、諸侯同格者の前にて手続上審理されたことがその者の前に提出され、さらに、本案につき何が法であるかにつき裁判されるべきである⁽²⁾。

(1) kündlich Schrift が、選ばれた仲裁裁判官につづつての書面上の表明であること $\text{Vgl. Deutsches Rechtsworterbuch, Bd. VIII, Heft 1, 1984, S. 93.}$

(2) RKGÖ 1555, II, VI, II, XXVIII, §. 2.

§. 3. として、上述の各コミサリウスは、なるべく迅速に審理し、悪意による遅滞は用いられても許されてもならない。しかし、上述の期間内に、選帝侯、諸侯、諸侯同格者の指名を行わず、あるいは、上述したところに従わない被告は、原告に対し、その者の請求につき速かに皇帝のカンマー裁判所における訴訟に應じるべきである。⁽¹⁾

(1) RKGÖ 1495, §. 24.

III. 選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、いかにして、いかなる裁判官の面前にて

帝国に直属する聖職者、グラーフ、ヘレン、貴族に対し法的手続を求めるべきか。

これに対して、また、聖職者、グラーフ、フライ、騎士、その他の帝国直属の貴族が、選帝侯、諸侯、諸侯同格者に対して法的手続をとるときは、原告となる選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、中立的な、だが被告の所在地から一二マイル以上離れていない〔所にいる〕その者〔と同一〕の身分のコミサリウスを得る権限があり、後述の法により、選帝侯、諸侯、諸侯同格者が訴えられる場合のごとく、そのコミサリウスの前にて手続が行われるべきである。あるいは、選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、その聖職者、グラーフ、ヘル、騎士、その他の貴族から、原告に対し、以下のごとく、中立的で原告（の所在地）から一二マイル以上離れていない所にいる三名の選帝侯、諸侯、諸侯同格者を指名するように求めることができる。原告たる選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、その中から一名の者を選ぶべきである。そして、原告は、本法によりその者の前にて訴え、手続を行うべきであり行うことができる。⁽¹⁾

(1) RKGÖ 1521, XXXIV, §. 15, 16.

IV. 聖職者、グラフ、フライヘル、貴族、都市は、いかにして、いかなる裁判官の面前にて

選帝侯、諸侯、諸侯同格者に対し法的手続を求めるべきか。

§. 1. まず、聖職者、グラフ、ヘル、貴族、都市が、いかなる原因であれ、聖俗の選帝侯、諸侯、諸侯同格者を法的手続にて訴えようとするとき、原告は、選帝侯、諸侯、諸侯同格者に対し、上述のごとく、⁽¹⁾その者の顧問の前にて原告に対してこれをめぐる手続を行うように求め、ついで、求められた選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、翌月、原告をその者の宮廷の顧問の前に、誠実に手続のために呼び出し、今回と次回の開廷期日に、貴族および学識者の中から誠実に採用されるべき宮廷のすぐれた九名の顧問を手続のために指名すべきである。だが、本案につき原告に対して違法行為を行ったアムトマンは指名されない。そして、原告あるいは原告のアンヴァルトの同席の下に、九名の顧問の中から被告が裁判長とするであろう一名の者が八名の顧問から、八名の顧問の中の最年長者が裁判長から、この事件において、両当事者の陳述に基づき全力を尽くして裁判し、それにつきいかなる悪意も用いず、それを何ら妨げさせないとの宣誓を受けるべきである。⁽²⁾

(1) RKGO 1555, II, §. 1, 2.

(2) RKGO 1495, §. 30.

§. 2. また、九名の顧問は、それらの者の前に出されたこの事件あるいは別の事件につき、それが未決にて係属している限り、そのことがこのような裁判の宣誓を妨げるべき、あるいは、妨げうるところでは、すべての宣誓から免れたままである。⁽¹⁾また、原告は、反訴にて顧問の前に引き出されることはない。この手続は、訴えが裁判所に提起された日から数えて半年で終結し、法的な期間猶予の裁判により、さらに延長されるときでも、一年と一日にて終了すべきである。また、被告たる選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、原告および原告が悪意なく随伴し、あるいは、原告のために派遣するであろう者に対し、期日に出頭して在廷するため、それらの者が拘禁されないように誠実な護衛をつけるべきである。だが、原告は、皇帝

のラント平和侵犯者、あるいは、その選帝侯、諸侯、諸侯同格者の公然の断固たる敵対者や加害者たるいかなる者も随伴したり派遣すべきでない。しかし、聖俗の選帝侯、諸侯、諸侯同格者が、上述のごとく、手続のためにその者の顧問の前に現れず、あるいは、上述のごとく原告に対して手続を配慮しようとしな⁽³⁾いときは、カンマー裁判所につき作成された本法に従い、その選帝侯、諸侯、諸侯同格者を皇帝のカンマー裁判所にて審判することが原告に許されるべきである。

(1) RKGO 1555, II, IV, §. 15, II, VI, §. 1.

(2) RKGO 1555, II, VI, §. 2.

(3) RKGO 1521, XXXIV, §. 13.

§. 3. として、聖職者、グラフ、ヘル、騎士、都市が、選帝侯、諸侯、諸侯同格者に対し、この法的仲裁につき、これにより迅速な手続が得られないとのいささか強い不服を訴えていたので、それにつき、等しく公正かつ迅速な手続の法が強く求められた。⁽¹⁾

(1) RKGO 1521, XXXIV, Pt.; RA 1548, §. 38.

§. 4. として、選帝侯および諸侯は、仲裁的手続、および、それらの者の選帝侯的・諸侯的自由特権につき、このような以前に制定された法から生じることによりいささか不服があったにもかかわらず、だが、いかなる者にも留意もそうとも看做されず、それらの者は、手続を控えることによりいささかの利益をはかり、誰かある者をとどめたり迷惑をかけんとしたので、聖職者、グラフ、フライヘル、騎士、都市に対してつぎのような仲裁的手続⁽¹⁾に向けて調整した。

(1) RKGO 1521, XXXIV, Pt.; RA 1548, §. 38.; RKGO 1555, II, VIII, §. 2.

§. 5. ます、九名の顧問に関する条文は、九名の顧問のうち少なくとも五名は貴族であるべきことを付け加え、先に規定さ

れたことを行われるべきである。⁽¹⁾

(1) RKGO 1521, XXXIV, §. 1.

§. 6. 第二に、それだけの顧問の前にて審理することを望まない原告は、指名された九名の顧問の中から、上述の法により、九名の顧問と同様に審理し裁判する権限を有する七名ないし五名の者を選ぶことができる。⁽¹⁾

(1) RKGO 1521, XXXIV, §. 2.

§. 7. そして、選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、上述の二つの場合には、それらの者の顧問を移すべき義務を負う。⁽¹⁾

(1) RKGO 1521, XXXIV, §. 2.

§. 8. 第三に、選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、三名の中立的な諸侯を指名し、その中から原告は、先に制定された法により手続を行い裁判すべき一名の者を選ぶ権限を有する。⁽¹⁾

(1) RKGO 1521, XXXIV, §. 3.; RKGO 1555, II, II, §. 2., II, III, §. 2., II, VII, §. 7.

§. 9. 第四に、また、その者が選帝侯、諸侯にとって問題であると思われる限り、原告は一名の中立的な、少なくとも高位聖職者、グラーフであるコミサリウスを、汝等の親愛なる皇帝陛下が帝国内に滞在のときは皇帝陛下から、皇帝陛下が不在のときは、ローマ国王たる朕から得ることが許されるべきである。⁽¹⁾

(1) RKGO 1521, XXXIV, §. 4.; RKGO 1555, II, II, §. 2.

§. 10. 第五に、被告は、原告が提示した九名の誠実で誹謗されない者の中から二名の者を選び、これに対して、選帝侯、諸

侯、諸侯同格者たる被告は、その者の顧問等から九名の者を指名し、その中から、原告が三名の者を選び、以後、その五名の者が、九名の顧問に関する法により示された事件につき誠実に手続を行うべきである。⁽¹⁾

(1) RKGO 1521, XXXIV, §. 5.

§. II. 第六に、原告は、二名の中立的で信頼に足る誠実な者、同様に、被告たる選帝侯、諸侯、諸侯同格者も、その者の顧問等から二名の熟達した者を、上述のごとくに命じるべきである。それらの者の前にて、上述の法に従い第一審の審理がなされる。そして、その四名の者が、判決につき意見が二つに分かれ、裁定者につき当事者の意見が一致しないときは、朕、あるいは、朕の不在のときは、朕の親愛なるローマ国王の兄弟たるローマ国王が、両当事者あるいは一方の当事者の申立に基づき、一名の中立的な裁定者を命じる義務を負う。その者は、一方の意見に決定するか、あるいは、これをしかるべき理由からやましさなくし得ないときは、その者の分別と良心により、法に適っていると考えられる独自の判決を下すべきである。だが、各当事者の二名の命じられた者は各当事者の費用、裁定者は共同の費用にて置かれる。⁽²⁾

(1) シュマウス＝ゼンケンベルクによれば、本文は、一五四八年法上の誤った文章がそのまま訂正されることなく本法に受け継がれたのであって、文意は、ここでも、他の箇所と同様に、「汝等の皇帝陛下、あるいは、汝等の親愛なる皇帝陛下がおられないときは、ローマ国王たる朕」である (J. J. Schmauss u. H. Ch. Senckenberg, aao, S. 88, N.f.).

(2) RKGO 1521, XXXIV, §. 6.; RKGO 1555, II, IV, §. 1, 2.

§. II. 第七に、原告は、訴えられた選帝侯、諸侯、諸侯同格者の顧問の中から五名の者を選び、それらの者は、先に定められた九名の顧問に関する法により裁判し審理を行う権限を有する。だが、被告は、原告が上述のごとくこの五名の者を選ぶ前に、被告に対して上述の事件において用いると主張された顧問の中から一名ないし二名の者を留保して除外する権限を有する。⁽¹⁾

(1) RKGQ 1521, XXXIV, §. 7.

§. 13. しかし、選帝侯、諸侯、諸侯同格者がその者の宮廷にそれだけの数の顧問を有しないときは、原告は、被告の貴族たるアムトロイテ、フォークト、プフレーガー、レーエンマンから残りの者を補充すべきである。⁽¹⁾

(1) RKGQ 1521, XXXIV, §. 7.

§. 14. 第八に、選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、少なくとも五名は騎士である九名の顧問を指名すべきであり、することができ。その九名の者の前にて、第一審の本案と執行とが、審尋され、各当事者が四度以上は行われない書面にて審理される。この書面は、四週間から四週間へと順次二重に提出され、少なくとも、第三の書面において、当事者のすべての防御方法、抗弁と、その者が事件において法的に利用しようとする事項が陳述され、第四の書面において、両当事者により手続は終結され、⁽¹⁾いづれの当事者からも、その第四の書面において新事項は陳述されるべきでない。しかし、判決人が、この第四の書面において、原告にそれが知られておらず、先の書面にて、それに対して防御方法を陳述することができなかったと判断しうるときは、判決人は、この見つけ出された新事項につき、これが最後の書面にて原告に不利に遮断されると判断すべきでない。また、原告にとつて、道のりが遠いため、上述の書面の提出期間が短すぎるときは、被告は、原告の申立に基づき、原告に対し、各書面の提出のためにお一四日の期間を許可すべきである。また、一方の当事者の証人を尋問する必要がある、これが求められたときは、証人は、両当事者によつて選任され認められたコミサルにより尋問されるべきである。しかし、当事者が、コミサル〔の選任〕につき調整しえないときは、当事者の各々が、そのために、一名の書記とともに、この証拠を採用し尋問する権限のある一名の尋問者を任命すべきである。そして、一方あるいは双方の当事者が証拠書類を提出したとき、各当事者は、このような提出されたその者の証拠書類の保護のために一通の書面を、そして、相手方から提出された証拠書類⁽²⁾に対して異議を唱えるために、また一通の書面を、このような提出された証拠書類が裁判上開示さ

れ、両当事者にそれに関する写しが交付された後、四週間のうちに提出する権限を有し、それとともに、再度、最終的に手続が終結される。上述の二つの場合に、被告たる選帝侯、諸侯、あるいは、諸侯同格者の顧問の上述の九名の中の最年長者は、原告あるいはその者のアンヴァルトの立ち会いの下に、他の八名の顧問の各々から、ついで、その他の八名の顧問の中の最年長者が、最年長者から宣誓を受けるべきである。すなわち、その者が、その事件において、両当事者の陳述に従い、その者の知力を尽くして裁判すること、そこにおいて、いかなる悪意も用いず、そこにおいて何ら妨げさせようとしなからうこと⁽³⁰⁾。

(一) ヘルム版じぢ' Wo aber darüber die Urtheiler in solcher vierden Schrift dermassen Neuerung finden (G. M. Ludolf, aaO., S. 154) 又はヘルム版じぢ' Nichtman版じぢ' dermassen Neuerung finden が欠けらるゝ (J. J. Schmauss u. H. Ch. Senckenberg, aaO., S. 89)。³¹ 参照 A. Laufs, aaO., S. 174.

(二) Nichtman版じぢ' und Widertheils fürbracht Urkund, 又はヘルム版じぢ' wider theils fürbracht urkundt (A. Laufs, aaO., S. 174), ヘルム版じぢ' wieder des Widertheils fürbrachte Urkund, 又はヘルム版じぢ' (G. M. Ludolf, aaO., S. 154)。

(三) RKGO 1521, XXXIV, §. 8, 9.

§. 15. また、その九名の顧問は、その事件、あるいは、それらの者の面前にて手続にもたらされている事件において、これが未決のまま係属している限り、これにより、この裁判の宣誓が妨げられるべき、あるいは、妨げられうところでは、被告からすべての宣誓を免れる⁽³²⁾。

(一) RKGO 1521, XXXIV, §. 10.; RKGO 1555, II, IV, §. 2.

§. 16. 当事者が、上述のごとく、証人の尋問のためのコミサールにつき調整しえないとき、各当事者により任命された尋問者と書記は、上述の九名の顧問の中の最年長者に対し、以下のごとく宣誓をして義務を負うべきである。すなわち、それら

の者は、この証人の尋問において、両当事者を等しく扱い、一方を他方に対して優遇せず、この証言を誠実かつ熱心に聴取して記録し、いかなる証人の証言も妨げず、また、この証言をいづれの当事者にも開示せず、秘匿し、裁判官としての上述の九名の顧問に、それらの者二名の尋問者の封印の下に封緘して悪意なく送付しようとする⁽¹⁾。また、聖職者、グラーフ、フライヘル、騎士、貴族、都市たる原告は、先の二条に示されたごとく、選帝侯、諸侯、諸侯同格者に対し反訴の被告たるべきでなく、しかも、反訴は上述の条文において行われるべきである⁽²⁾。

(1) ルドルフ版では、これ以下は第一七条となっている (G. M. Ludolf, aaO, S. 154)。従つて、以下条文は一条ずつずれてい^る。

(2) RKGÖ 1521, XXXIV, §. 11, 13.

§. 17. さらに、上述の八つの方法のうちから原告の欲する一つを選ぶことは、原告の任意の意思に委ねられるべきである。選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、それを採用し、それに従う義務がある⁽¹⁾。

(1) RKGÖ 1521, XXXIV, §. 14.

§. 18. このような聖職者、グラーフ、ヘル、騎士、都市の仲裁は、すべて上述のごとくに、また、諸侯、あるいは、諸侯同格者に対する市民、農民等の臣民についても生じ、上述のごとく行われるべきである⁽¹⁾。

(1) RKGÖ 1498, §. 30, 32.; RKGÖ 1500, XI.; RKGÖ 1548, II, V.

V. 帝国直属で他の裁判権に服しない聖職者、グラーフ、フライ、貴族は互に
いかにして、いかなる裁判官の面前にて訴訟上要求すべきか。

§. 1. これに対して、帝国に直属している聖職者、グラーフ、ヘル、貴族、あるいは、クネヒトが、帝国に直属している聖職者、グラーフ、ヘル、あるいは、貴族に対して請求する権利を有するとき、被告は、原告の申立と告知に基づき、中立的で、原告から一二マイル以上離れていない三名の選帝侯、諸侯、あるいは、諸侯同格者を推挙する義務を負い、そこから、原告が一名を選び、ついで、その選ばれた者が適当な場所にて法廷を開き、事件を聴取し、(前節の「第三に、選帝侯云々」で始まる条文において定められた)⁽¹⁾法に従つて、審理し訴訟を進行すべきである。あるいは、それがその者に受け入れられ難いときは、皇帝陛下、あるいは、汝等の親愛なる皇帝陛下が帝国内におられないときは、ローマ国王たる朕から、一名の中立的なコミサルを得て、上述の選帝侯、諸侯、あるいは、諸侯同格者がいかに訴えられ、手続がなされるべきかにつき制定された法に従い、その者の面前にて審理がなされるべきである。⁽²⁾

(1) なお、ルドルフ版には () の記号がなく (G. M. Ludolf, aO., S. 155)。

(2) RKGO 1521, XXXIV, §. 17, 18.; RKGO 1555, II, IV, §. 8.

§. 2. そして、さらに、各々の帝国に直属せず他のヘルシャフトに服している者、あるいは、選帝侯、諸侯、ヘルシャフトの裁判所に直属する事件については、法に従い、その者の正規の裁判官の下にとどめ置かれるべきである。⁽¹⁾

(1) RKGO 1495, §. 29.; RKGO 1521, XXXIV, §. 19.; RA 1524, §. 18.; RKGO 1555, II, I, §. 1.

VI. 任命された顧問の移動、当事者の護衛、アペラチオン等がいかに行われるべきか。

§. 1. また、九名の顧問等に関する上述の法において規定され、各々の帝国所屬者に許されているごとく、すべての上述の条文において、皇帝のカンマー裁判所にアペリーレンすることが各当事者に許されるべきである。そして、判決が下され、カンマー裁判所にアペリーレンされたとき、カンマー裁判所長に対し、当事者自ら、あるいは、その者の訴訟代理権のあるアンヴァルトを通して行う宣誓にて、その者がこのようなことを第一審において知らなかったこと、あるいは、これを提出することができなかったことが当事者により与えられ、また、この新たな事項の提出がその者にとり権利を得るために適切と思われる場合でない限り、新たな事項は提出されるべきでない。そして、すべての上述の第一審、第二審の手續において、被告たる諸侯につき先に定められた⁽¹⁾ごとく、訴訟が遂行され審理されるべきである。

(1) RKGO 1521, XXXIV, §. 12, 20.; RKGO 1555, II, VIII, §. 9.

§. 2. また、選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、それらの者の顧問に、上述のごとく、事件を負担させて裁判させようとすることができ、また、それらの者の顧問を移すべきである。加えて、それらの者は、原告および原告が悪意なく随伴するであろう者に必要な護衛をつける義務を負う。⁽¹⁾

(1) RKGO 1521, XXXIV, §. 21.; RKGO 1555, II, IV, §. 2.

§. 3. だが、騎士、臣民、ラントゲッセンとの間に特別な取り決め、習慣のある⁽¹⁾各々の選帝侯、諸侯、諸侯同格者、また、聖職者、グラーフ、フライヘル、騎士等の貴族が、それらの者に対し、上述の条文の外にそれにつき不利になることはない。⁽²⁾

(1) ルドルフ版では、取り決め (geding) のつぎに特権 (Freyheit) という言葉が挿入されている (G. M. Ludolf, aaO.,

S. 155)。

(2) RKGO 1521, XXXIV, §. 22.

VII. 諸侯領とグラーフシャフト等をめぐる訴訟においていかに審理されるべきか。⁽¹⁾

(1) RegimentsO 1521, §. 7.

また、レーエンとして帝国に由来する諸侯領、大公領、グラーフシャフト等に関して事件が生じ、一方の当事者に最終的に完全にかつ最終的に敗訴判決が下されるべきときは、朕は、皇帝陛下、あるいは、汝等の親愛なる皇帝陛下がおられぬときは、ローマ国王たる朕に、しかし、本法のその他の事件に不利にならないようにして、その判決を留保しようとする。だが、事件をドイツ国民の帝国から移そうとはしない。

VIII. ラント平和侵犯でない占奪につき、いかにして、いかなる裁判官の面前にて

審理がなされるべきか。⁽¹⁾

(1) RA 1548, §. 38.

§. 1. 皇帝のラント平和法とその処罰の下になく、暴力的ではないが違法になされる普通単純占奪につき、今後、神聖(ローマ)帝国において、将来的に種々様々な間違いが生じうるであろうが故に、選帝侯、諸侯、一般等族、また、欠席者の使節、顧問、は、このような場合に、安定した平和と公正な法を維持するために、被占奪者を助けて迅速な仲裁的解決を得させるに必要なことをよく想起すべきである。不当に占奪された者が、普通成文法において効果的に規定されているごとくに、その者の財産を速かに回復することができるように。だが、本帝国議会にて調整し決定された宗教和議法の規定に対

し、その内容すべてにつき不利になるべきでない。

§. 2. それ故、一様に遅滞なく手続が促進されるために、皇帝陛下の選帝侯、諸侯、諸侯同格者、聖職者、グラフ、フライエンヘル、都市は、臣民的敬意と適意にて、この普通単純占奪に関する事件において、帝国法と本カンマー裁判所法の定めたごとくに、ある程度仲裁に応じ、従つてまた、事件を手近に移し被占奪者に対するしかるべき憐れみから、被占奪者が、手続のしかるべき救済を通して迅速にその者の財産の正当な返還を受けうるように枚挙された事例において仲裁を以下のごとく整えた。⁽¹⁾

(1) RKGO 1555, II, IV, §. 4.

§. 3. 以後、帝国直属の選帝侯、諸侯、諸侯同格者が、他の聖俗の選帝侯、諸侯、聖職者、グラフ、ヘル、貴族、都市、市民、農民により、あるいは、選帝侯、諸侯、諸侯同格者が、他の選帝侯、諸侯、等族の臣民、あるいは、その者の支配下にある自らの臣民により、その者が聖俗であるか貴族であるかどうかを問わず、いかなる名前であろうとも何ら例外とされず、その者の財産、あるいは、その者の有する占有、ゲヴェーレが占奪されたとき、⁽¹⁾占奪された選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、占奪者がいかなる身分の者であれ、その者に対し、選帝侯、諸侯、あるいは、諸侯同格者が、帝国法により相互の間で有する仲裁を用いるべきである。だが、以下に述べられるごとく迅速かつ遅滞のない節度ある弁論にて。しかし、被占奪者が、聖俗を問わず聖職者、グラフ、フライヘル、貴族、都市、市民、農民、臣民であるとき、その者は、選帝侯、諸侯、諸侯同格者が、上述のごとく、グラフ、騎士に対して行う仲裁の一つを任意に選択する権限を有する。また、その者は、それに基づき、上述のようにしてその者を占奪した選帝侯、諸侯、諸侯同格者に対し、この方法を明瞭に区別して示し、それに基づき、その選択された方法に従い、その者に九名ないし別の人数の顧問、あるいは、顧問と一緒に選ばれ、あるいは、任命された者を据えるように求めるべきである。⁽²⁾

(1) シュマウス版の本条が (J. J. Schnaus u. H. Ch. Senckenberg, aaO., S. 91. なお参照 G. M. Ludolf, aaO., S. 156) ラウス版では、ここまでは第三条となつてゐる (A. Laufs, aaO., S. 178 f.)。そのためラウス版では以下条文は一条ずつずれてゐる。

(2) RKGÖ 1555, II, IV, §. 4.

§. 4. その選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、原告に対し、原告の要求後一カ月以内に、あるいは、その者がしかるべき相当な故障を有するときは、遅くとも六週間以内に、常に原告が申し出た方法に従つて、九名あるいは別の人数の顧問、あるいは、顧問と一緒に選ばれ、あるいは、任命された者を、据える義務がある。従つて、原告は、占奪者に対する申立後、上述のごとく一カ月以内、あるいは、六週間以内に、通常の召喚状の提出により手続を開始し、それに基づいて、法的にしかるべきごとく手続を遂行しうる。⁽¹⁾

(1) RKGÖ 1555, II, IV, §. 14.

§. 5. また、原告がアドヴォカートとプロクラートルを付けられず、あるいは、他所から随伴することができないとき、選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、原告に対し、原告の申立に基づき、法に従い、しかるべく誠実にアドヴォカートやプロクラートルの職務を果たし、しかるべく奉仕するために、しかるべき報酬にて、あるいは、原告が貧困につき宣誓しようとする場合、選帝侯、諸侯、諸侯同格者の下にゲゼツセンしている熟練の思慮と学識のある者を原告に付けるべきである。また、この場合に、選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、それらの者の義務を免除すべきである。

§. 6. そして、任命された者は、この普通占奪に関する事件において、普通法に従つて、略式に訴訟を遂行し、手続を迅速に終結させ、事件が訴訟に係属されて後、あらゆる故障と引き延ばしなしに一年以内に弁論を終え、原告に対し終局判決が

告知されるべきである。

§. 7. しかし、原告が、占奪者に対し、上述の仲裁の方法により、原告に対し三名の中立的な諸侯を指名し、そこから、一名を仲裁裁判官に選ぶことができるように求めたとき、これを求められた選帝侯、諸侯、諸侯同格者は、拒否することなく実行し、上述の方法に従って、原告に対し三名の中立的な諸侯を提案し、ついで、また、その選出後、原告の選んだ者に対し、一四日以内に事件を担当するように求めるべきである。そして、この場合、あるいは、原告が上述の法により、原告に権限のある一名のコミサルを得たとき、選ばれた諸侯、あるいは、コミサルは、原告に対し、原告の申立に基づき、一カ月以内にその者に対し召喚の判決を下して事件に係属させ、上述のごとくその者を救って一年の期間の内に弁論を終結させる義務を負う。

(1) RKG 1555, II, IV, §. 9.

§. 8. そして、判決が原告の勝訴、被告の敗訴であり、それにつき、通常の方法にてアペリーレンされず、また、原告がカンマー裁判所法の期日に判決により占有回復されないときは、原告の申立に基づき、勝訴した部分につき、皇帝のカンマー裁判所により、上述の判決のしかるべき執行を求めて訴訟と審理がなされ、原告は、この判決が上述のカンマー裁判所により下されたと全く同様に救済されるべきである。⁽¹⁾

(1) RA 1521, §. 27.; Lf 1548, XXIX, §. 2.; RKG 1555, III, LVIII.

§. 9. しかし、被告たる選帝侯、諸侯、諸侯同格者が敗訴し、そこから通常の方法にて、普通法に従いアペリーレンしたときは、その者は、そのアペラチオンを正規に提起された時点から数えて三カ月の内に、皇帝のカンマー裁判所に提出して係属させる義務を負う。そして、アペランテンは、この第二審において、その者が、しばしば述べられた仲裁の際に本カン

マー裁判所法において規定された宣誓を行うのでない限り何ら新たな事項を陳述することは許されず、訴訟は、上述のカンマー裁判所により迅速に遅滞することなく行われるべきである。⁽¹⁾

(1) Lf 1548, XXIX, §. 2.; RKGO 1555, II, VI, §. 1.

§. 10. しかし、第一審において、原告敗訴、被告勝訴の判決が下されたときは、原告は皇帝のカンマー裁判所に法があるごとくにアペリーレンし、その者のアペラチオンを遂行する権限を有する。そこにて、その者に対し、迅速かつ遅滞なく事件が解決に達せられる。だが、その者は、上述したと同様にアペラチオンを三カ月内に提出して係属させる義務を負う。⁽¹⁾

(1) RKGO 1555, II, VIII, §. 9.

§. 11. しかし、占奪者が、原告に対し、九名ないし別の人数の顧問、あるいは、顧問とともに選ばれ、あるいは、任命された者を、上述のごとく、一カ月の期間内に、あるいは、しかるべき故障の場合には、遅くとも六週間以内に任命しないとき、あるいは、選ばれた諸侯、あるいは、得られたコミサルが、原告の申立に基づき、原告が一定の期間に手続を開始したいがため、その者に対して一カ月の期間内に召喚の判決を下そうとしないとき、あるいは、求められた選帝侯、諸侯、等族が、原告に対し三名の中立的な諸侯を直ちに指名せず、あるいは、原告の申立に基づき、その者にアドヴォカートとプロクラートルを付けなかったとき、単純占奪の事件は、上述のごとく、直ちに、法上当然に、皇帝のカンマー裁判所に移審され、原告の申立に基づき、その者に召喚の判決が下され、また、この場合に、上述のカンマー裁判所にて訴訟する義務のある占奪者に対して、法上しかるべく迅速に訴訟が遂行されるべきである。⁽¹⁾

(1) RKGO 1555, II, VIII, §. 4.

§. 12. 同様に、九名の顧問、あるいは、顧問とともに選ばれ、あるいは、任命された者、あるいは、得られたコミサル、

あるいは、選ばれた諸侯が、事件が係属した後一年以内に原告のために最終的な仲裁を得させることができなくなったときは、一年の経過後、再度、法律上当然に皇帝のカンマー裁判所に移審され、原告の申立に基づき、任命された者、あるいは、得られたコミサル、あるいは、選ばれた諸侯の前の訴訟状態にて、上述の皇帝のカンマー裁判所により再開される。そして、任命された者、コミサル、選ばれた諸侯は、原告の申立に基づき、占奪者の費用にて、全訴訟記録を遅くとも六週間以内に引き渡す義務を負う。

§. 13. しかし、それらの者が、これを懈怠したときは、皇帝のカンマー裁判所は、強制状を判決で認め、秩序罰の下に、上述のごとくそれらの者にこの記録を交付させる。そして、以後、原告が長期間待たされず、迅速に仲裁に達しうるように、この占奪の事件につき手続が迅速に追行されるべきである。⁽¹⁾

(1) RKGO 1555, II, III, II, IV.

§. 14. さらに、帝国に直属の聖職者、グラーフ、貴族が、聖俗の選帝侯、諸侯同格者、あるいはまた、帝国に直属の他の聖職者、グラーフ、貴族に対し、暴力的なラント平和侵犯行為なしに、だが違法にその者の財産につき占奪するとき、原告は、それにつき占奪者に対し手続を行い、帝国法が、聖職者、グラーフ、貴族に対し、上述の選帝侯、諸侯、諸侯同格者におよび、聖職者、グラーフ、貴族相互につき区別して認める仲裁を利用することができる。だが、手続は、あらゆる方法にて設けられ、迅速に追行され、原告を助けて一年の期間内に仲裁すべきであり、これが遅延した場合、本法においてすでに規定されたごとく、事件は皇帝のカンマー裁判所に移審される。⁽¹⁾

(1) RKGO 1555, II, III, II, IV, §. 9, II, 12, II, V, II, VIII, §. 12-14.

§. 15. その者に両当事者が共にゲゼッセンしている一名の選帝侯、諸侯、等族の臣民の間で、あるいは、原告が一方の、被

告が他方の選帝侯、諸侯、等族の下にゲゼッセンしている臣民の間で、その者に対する平和侵犯とならない上述の単純かつ普通の占奪につき紛糾したときは、正規の裁判所の第一審において、法律上しかるべきように論議され解決されるべきである。⁽¹⁾

(1) RKGO 1555, II, 1, §. 2.

§. 16. この時点以前に、ラント平和侵犯であれ、単純普通占奪であれ、誰かが占奪されてまだ回復されていないときは、しかるべき方法にてその促進と回復を求めて解決にもたらしうことは、ここではその者から奪われずに留保される。だが、被告の抗弁は、被告に留保される。⁽¹⁾

(1) Lt 1548, XII.